# 「鶏西」を知っていますか(2)

## 日本語学校見学記

現代中国学部　梅田康子

「言葉を身につけるなら鶏西へ行け」と言われるほど、大勢の若者が日本語を学ぶ中国黒龍江省鶏西市。2011年８月、私たちは省都ハルビンからバスで７時間半かけ、ようやく鶏西に到着しました。前号（語研ニュース26号）では、日本語学習の町「鶏西」の紹介と、鶏西にいたるまでの道のりについて書きましたが、今号は、いよいよ日本語学校見学です。日本を出発して３日目、一晩寝ればバス旅の疲れもすっかりとれ、朝早くからS学院を訪ねました。

S学院は、1998年に設立された教員約40名、学習者は1,000名を超える大規模校で、訪問したときは、まだ新学期が始まっておらず、ちょうど入学手続きの時期でした。自宅から通う学生は少なく、ほとんどの学生が遠くから来ているので、住むところもさがすことになります。女子は学校の宿舎に住む人が多いようですが、男子は近くのアパートなどを借ります。この日も朝から２，３人の学生さんが入学手続きに来ていました。

こちらの学校では、このような早く到着した新入生のために、入学前講座を開いています。あいうえおの読み方、書き方、発音などの授業です。また、早く戻ってきた２年生のためにも、復習クラスを開いています。こちらは、日本語能力試験の対策講座などです。私たちは、こうした非正規のクラスを２つ見学しました。

まず、午前に、日本語能力試験対策の授業を見せていただきました。クラスは20名程度、授業の内容は、試験の出題基準に合わせた文型の復習で、文法的な説明、例文の解釈など、一般的な授業展開と言ってよいでしょう。先生は、30前後の女性でしたが、もう大ベテランという感じです。文法説明も立て板に水、例文もすべて暗記していて、教案も黒板も見ず、明るい笑顔でつねに学生の顔を見ながら、自信満々に教えていました。リピート練習や拡張練習、応答練習といったオーソドックスなドリル練習をしていましたが、特徴的だったのはその声の大きさです。先生は笑顔を崩さず、とっても大きな声で教えます。そして、学生たちも先生の後について、教室中に大きな声を響かせて例文を繰り返します。そのやり方はこれまでマスコミで紹介されたそのままで、先生に負けじと怒鳴るように声を出している様子には、圧倒されました。もし100人だったら、授業後にはきっと耳鳴りがしていたでしょう。

嵐のようなリピート練習

ロビーに掲げてあるスローガン

見学の後、先生に伺うと、大きな声で授業を行うのは学校の方針だということです。自信がないと大きい声が出ない。だから学生は予習するし、授業にも集中することができるとのことでした。先生はもう普段の地声も大きくなってしまったそうです。ち

なみに、こちらの学校にはいろいろなイベントに使える広いロビーがあり、日本語の他に英語、韓国語で様々なスローガンが掲げてあります。なかでももっとも目を引いたのが写真のスローガンです。

ここまでとは言いませんが、大声で日本語文を繰り返す学生さんたちは、やる気パワーがみなぎっていました。

お昼は学校の食堂でいただきました。当地は、朝鮮族（韓国朝鮮系の中国人で、少数民族の一つ）も多く住んでいるためか、キムチをはじめ辛い料理が多かったです。日本の学校給食のように、並んで料理をよそってもらいます。違っているのはマイ箸、マイボウルということ。みな自分に合う大きさの食器を持ってきます。

食堂はそれほど大きくないのですが、学内にある書店は大きくて、語学関係の書籍が充実しています。S学院には英語、韓国語のコースもあるので、英語や韓国語のも置いてありますが、やはり日本語の本が多いです。日本語教材は、鶏西でもっとも揃っていて、他校の学生も買いに来るそうです。

お昼をはさんで、午後は入学前のクラスを見学しました。入学前だというのに、かなりの人数で、この日はディクテーションをやっていました。先生が言ったことばをノートに書き、指名された人が、黒板に答えを書きます。まだ、

**ちょっと恥ずかしそうに書いている**

大声授業を受けていないからでしょうね。自信がなさそうな人が多く、さっさと書く人もいれば、左右を見たり、誰かに答えを確認しながら書いたりする人もいます。ちなみに、このクラスの先生は、若い男の先生で、かなりのイケメンでした。

授業後、あのスローガンが掲げてあるロビーで、学生さんたちと交流しました。こちらの学校の自慢は、学生の発音の良さだそうです。先生たちは、日本語ネイティブではありませんが、発音を重視していて、アクセントもきちんと指導しています。確かに、このとき交流した学生さんたちは、はっきりした発音で話すので、聞き取りやすかったです。話すことに自信がないと訴える人もいたのですが、もっと自信を持ってほしいですね。

ところで、このS学院を始め、現在鶏西の日本語学校では、一時より入学者が減少しているそうです。鶏西だけではありません。もともと中国の日本語教育は、北の方が盛んでしたが、最近は、南方にも日本語学校が増えてきたため、東北部に学習者が集中するということは無くなってきたようです。また、東北にある朝鮮族の中学・高校のほとんどが外国語として日本語を教えていたのですが、社会的ニーズの変化から英語にシフトしてきたことも一因になっていると思われます。

国際交流基金によると、海外の日本語学習者は、およそ365万人（2009年）で、国別では、韓国がもっとも多く96.4万人、ついで中国が82.7万人です。合わせるとほぼ半数ですね。では、中国の日本語学習者はなんのために日本語を学んでいると思いますか。大学生（高等教育）の場合、１）就職、２）漫画･アニメ等の知識、３）日本語そのものへの興味、です。中高生（中等教育）の場合、１）日本語そのものへの興味、２）大学受験等、３）歴史・文学・漫画・アニ

メ等の知識、です。そして、今回おじゃましたS学院のような一般の語学学校では、1）留学、2）就職、3）日本語そのものへの興味、です。調べてみたら、愛大にもS学院で日本語を勉強していた留学生がいました。夢が果たせたわけですね。

さて、みなさんは、何のために外国語を勉強しているのでしょうか。その言語自体への興味はありますか。そして、私は…。中国東北の鶏西という地方都市で、熱血教師と出会い、熱い日本語学習者と触れ合い、良い心地でバスに乗り、ハルビンまで8時間の帰途につきました。

参考：国際交流基金「日本語教育国・地域別情報」
http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/china.html

# 受身表現の“被高速”現象
## －中国語の新用法から－

現代中国学部　薛　鳴

中国に行く度に新しい言葉に出会う。今年も中国でたまたま手にした地方紙の見出しに“〇〇被死亡”というのを目にしたとき、新鮮さと驚きを覚えた。

筆者が大学で日本語を勉強するとき、日本語の受身表現に「間接受身」（「迷惑受身」とも）という、中国語の受動文にない受身の用法を知った。例えば、次のような例文があった。

①彼は幼少時に父親に死なれ、家計が苦しくて大学に行けなかった。
②昨夜、隣りの赤ちゃんに泣かれて、よく眠れなかった。
③お客さんに来られて勉強できなかった。

これらの文を中国語に訳す際に、そのまま“被V”と直訳できない。以下のような意訳になろう。

①′他儿时丧父，家境困难，没能上大学。
②′昨晚隔壁的孩子哭得我没睡好觉。
③′来客人，搞得我没能学习。

少し高度な訳になったが、言い回しの工夫を差し引いても、中国語では“死”、“哭”、“来”のような自動詞は“被V”の形にできないため能動文になる[i]。それだけに、その新聞の見出しの“被死亡”を見たときは、中国語もとうとう「死なれた」的な用法が出現したかと思った。が、記事の内容を読んでみると、ある同姓同名の死亡者のせいで、その〇〇というタレン